

「絶対に許さない、アイツ殺してやる！」と、彼女は息巻いていた。もう何十年前も前のことだ。詳しい経緯は知らないし、知りたくもない。しかも彼女が辿りついた究極の「コシカタ」は「丑の刻参り」。そりゃあ確かに足がつきにくいけど……、本気!?

「丑の刻参り」の定番が完成したのは江戸時代のことらしい。

草木も眠る丑三つ時、髪を振り乱し、顔に白粉を塗り、ろうそくを灯した鉄輪を被り、高下駄を履いた白装束の女が、憎い相手に見立てた藁人形を神社の御神木に五寸釘で毎夜打ち込む。これを七日間繰り返せば満願となって相手が死ぬと信じられた。藁人形に釘を打ちつけた部分から発病するとの説もある。

人形ひしだたを使った呪詛は古墳時代から既に行われていたという。奈良では胸に鉄釘が打ちこまれた状態の八世紀の木製人形ひしだたが出土している。鉄釘自体が渡来文化であることから、こうした呪術は大陸渡来のものではないかともいわれているそうだ。

なにはともあれ、彼女の憎き相手が未だ健在なところをみるとその効能や如何に。それとも満願成就の前に諦めたのか飽きたのか。

この「丑の刻参り」と対極をなすのが「お百度参り」だ。相手の無事を願うなどプラス方向の祈りを捧げるために百日間毎日参拝するというもので、出征兵士の無事や難病快癒を祈る姿は今やドラマでしか見られない。昔ですら、何でも簡素化するのが得意な日本人は、一日に百度お参りして百日詣の代わりとするなど、「四万六千日」的なラクチン手段をちゃっかり編み出していた。

今年の春、プーチンの顔写真を貼った藁人形を某神社の御神木に打ちつけた男が器物損壊罪で逮捕された。ひょっとしたらあのムーンフェイスは?!

それにしても今どき藁を手に入れるのは難しだろうと、何でも売ってるあのAmazonを面白半分で探してみると……あった! 「藁人形呪いセット千四百六十円」。教唆や幫助にはならないとしても、こんなもの売っていいのかな。

呪い代行業者などというのものもあるようで、その筋のサイトには「実績あるプロに任せよう」「短期間で確実に効果」「支払いは銀行振込またはカード決済」「お手軽な料金」などという文字が躍る。やれやれ